31　みつえ高原牧場

ー「ここが奈良県？」そんな風景ですー

平成 21 年，2009 年，丑年の弘行君への年賀状は牛のお話です。

奈良県の最東端の御杖村は，私が昭和 33 年 4 月，教員としての生活をスタートした村です。当時は県内の最寄り駅である榛原からバスで 2 時間あまりもかかるという山村でしたから，通勤は不可能，下宿しての勤務でした。

その御杖村に，「奈良県畜産技術センター・みつえ高原牧場」がオープンしたのは平成 13 年のことです。この施設をゆっくりと見学したいと車を走らせました。昔は，積雪の多い日には，全輪にチェーンを装着した定期バスが，峠をよじ登り，今のようにガードレールが整備されていない道路の端を見極めて他の車と対向し終点の榛原まで半日もかかってやっとたどり着くといったこともあったのですが，トンネルが新設され道幅が広くなった今は，天理からでも 1 時間あまりで着くことができました。

みつえ高原牧場は敷地が 68ha もあり，ここで 300 頭ほどの牛が飼育されています。そのうちホルスタイン種が 50～60 頭，あとは黒毛和牛ということでした。

本館から下を眺めると 6 棟ほどの牛舎が並んでいます。ここには，供卵牛舎，繁殖牛舎，受精卵処理棟などがあり，優秀な子牛や受精卵

を県内の畜産農家に供給しています。

堆肥舎では，牛の糞(ふん)を活用して堆肥を作り，これも農家に供給しています。牛の糞はホルスタイン種で 1 日 50～60kg，和牛はその 3 分の 1 程度だそうです。

草地でゆったりと草を食べている牛について尋ねると妊娠して安定期にある牛は 3 か月ほど放牧しているとのことでした。その間，草を食べて昼夜を自由に過ごすそうです。1 人立ちの生活なのですね。

弘行君も今年は 15 歳，1 人立ちに近づく年なのかな。では，今年もがんばりましょう。

（やまと・平成 21 年 1 月号所載）

スポットの案内

みつえ高原牧場は宇陀郡御杖村菅野 1775-5 にあります。国道 369 号線を走り，御杖村役場から少し行ったところにある標識に従って左折，ここから約 3km のところです。電話は 0745-95-6660 です。

理科のワンポイント「牛」

牛は昔から家畜として大切に扱われていました。田んぼを耕し，荷車を引いていました。小学生の頃，暮らしていた村では，大和高原の村との間で役牛の貸し借りが行われていました。国中(くんなか・奈良盆地の村々です)と山中(さんちゅう・大和高原の村々)の農業の忙しい時期がずれていることを使って奈良盆地で牛にさせる農作業の忙しいときには国中で，涼しい大和高原で忙しいときには山中で仕事をさせようというのです。山中から国中へ，国中から山中へ，行き来する牛の背中には相手の家へのお土産が積まれていたことを思い出

します。多くの農家には家の中に牛が住む部屋があり家族といっしょに暮らしていました。牛も家族であると言ってよかったのでしょう。でも，農家ではない私はにおいが少し気になったものでした。

教員として着任した村では乳牛の飼育が盛んに行われていました。絞った乳が集められ出荷されるのです。この村でも牛はとても大切にされていました。どの牛にも付いていた血統書というものを見せてもらいました。それにはこの牛の特徴のほかに父の名前，母の名前はもちろん，父の父(祖父)と父の母(祖母)の名前，母の父(祖父)と母の母(祖母)の名前だけでなく，なんと曽祖父の名前まで書かれていました。私たち人間の戸籍よりも詳しいことに驚きました。乳牛が子牛を生んで乳を出すようになったとき，初乳(最初の乳)は飲めないということで，牛乳風呂が沸かされました。初めての経験でした。

こうした牛のほかに肉牛として私たちの食料になってくれる牛もいます。そして，牛革はかばんやランドセル，野球のグローブ，ジャンパーやベルト，靴などに使われます。さらに，どの牛の場合も牛糞は肥料として大切なものでした。そして，人々は牛に感謝しながら仲良く暮らしていたのです。

ウシは 4 つの胃を持ち，飲み込んだ食べ物を口に戻してもう一度かむ動物です。このようなことを反芻(はんすう)といいます。1 番目と 2 番目の胃で食物はだ液とよく混ぜられます。「食い戻し」と呼ばれる丸い塊になった草は口に戻りもう一度よくかまれます。だからウシは寝転んで口をもぐもぐさせているのです。そして，十分にかみくだかれ，だ液と混ぜ合わされた後，3 番目の胃に入ります。ヒトの胃と同じような働きをするのは 4 番目の胃ですが，ほかの胃の中でも，中にいる細菌などのはたらきで消化が行われています。